



## 健康と保育

富山大學教育學部 波根治郎

### (一)

健康の問題は幼稚園保育において比較的軽く取扱われているのではなからうか。眼・耳その他の感覺器官に缺陷のある幼児や虚弱兒は何といつても幼稚園生活がうまくいかない。身體的に缺陷があつたり、虚弱で病氣し勝ちであるということとはその幼児の氣質や性格に影響する。(本誌三月號拙稿を参照されたい)かゝる幼児は往々にして不注意であつたり、癩癪持ちであつたり情緒が不安定である。幼児の躰けの問題も實は健康の問題であることが多い。一般に身體的缺陷の有無健康か不健康かということが各個人の人格性(人柄、パーソナリティ)に何時とはなしに永い間に影響したものが屢々その人の全生涯を決定する程の力をもつが、それは幼児期の缺陷や疾病から由來すると言つても良い。發育不全兒や虚弱兒は健康兒と同一條件で遊戯に没頭し得ない。劣等感情や社會的

孤獨の芽生えはこゝに始まりそして成長する。

虚弱兒や身體缺陷兒は家庭において甘やかされ、習慣的に依他的である。幼稚園では同情され過ぎたり、時には無視されたり、時には友達から敵意を示されることすらある。そこで教師はかゝる幼児と自分との關係において、また彼と彼の友達との間柄に色々な問題をもつわけである。かくの如く虚弱兒・缺陷兒のもつ最も困難な問題は醫學上の問題であるよりは寧ろ心理學的な問題であることが多い。また逆に色々な疾病が情緒的葛藤とか要求阻止(本誌五月號拙稿を参照されたい)等の心理的原因の結果であることも多い。

かゝる健康の問題は僅かの不幸な幼児丈の問題として片附けることは出来ない。ターマン等の精密な調査によると全兒童の約三分の一が健康兒であり、残りの三分の一は僅かでも缺陷をもち、最後の三分の一は大きな負担を擔つている。

(註一)教師の所謂取扱いくい子供というのは大抵その背景にかゝる身體的條件をもつ。随つて私共が幼児の智的・情

緒的・社會的發達の調和的健全を期す以上、この問題を没却するわけにはいかないと思う。

(二)

サイデンストリツカー等の調査による身體的缺陷をもつ兒童の百分比を參考迄に擧げると左のやうな工合になる(註2)

齒科 齒(一本以上) 六六%

缺齒(一本以上) 六

齒處置濟(一本以上) 二八

眼科 視力障害 三二

眼瞼炎 一八

眼筋異常 一

耳鼻科 耳朧れ 一二

鼓膜障害 九

聽力障害 三

内耳炎 一

鼻カタル 六

鼻軟骨異常 二

咽喉科 扁桃腺炎或は肥大 三一

扁桃腺切除 一六

アデノイド 六

口呼吸 一〇

内科 頸部淋巴腺肥大 三八

甲狀腺肥大 一〇%

心臟病 四

結核 〇・三

その他 吹出物 五

背柱彎曲 二

言語障害 一

小兒癲痺 〇・二

これ等の缺陷疾病は多く若干が平行してやつてくる。例えはアデノイドで鼻の通路に障害のある子供は口呼吸をする。そのため扁桃腺炎や慢性鼻カタルをおこしたり、齒並びが悪くなつたり中耳炎に罹り易くなる。

筆者の近所にアデノイドの子供がいるが、口腔と鼻腔との通路を妨げられているので口で呼吸をしている。歐氏管も悪くなるので聽力障害をおこすこともある。鼻は低くなり、上齒は突出して齒並びが悪くなる。随つて言語表現が拙い。就寝中にはいびきをかき、食事時嚙下に困難を感じる。呼吸が健全でないので他の子供程遊び得ない。即ちアデノイドは單に生理的機能障害文に止らず、生活上大きな負擔になり、情緒不安定から瑣事にも直ぐ泣き出すことが多い。

扁桃腺も肥大すると呼吸と嚙下に障害を來し健康を失う。かゝる疾患をもつ幼児はいらいらし、おちつかず、ものうげで疲れ易い。

齒の疾患も多く、これも他病の原因になり易い。食物を充分咀嚼出来ない。悪い齒並びは容貌を損い、時に劣等感、情

緒不安定を招く。

甲狀腺の異常が色々と心身に重大な機能障害を與えることは人のよく知るところである。

次に言語障害には色々な型があり、色々な原因から来る。吃る子供の多くは情緒的葛藤がその原因である。誰でも所謂大家と初面談する時など口が濁いたり、はつきりものが言えないことを経験している。

一般に言語困難の原因として左の如き場合が考えられる。  
一、精神薄弱、發育不全。能力の低い子供の言語困難は普通に見られる現象である。

二、疾病、神經症、榮養不良。

三、鬼唇、舌の異常、齒の異常、アデノイド、扁桃腺の如き發音器官に影響する鼻、咽喉の障害缺陷。

四、赤ちやん臭い話し方は大低溺愛する両親に養育される幼児の赤ちやん時代の名残り、本人の氣付かぬ習癖であるから矯正したい。

五、發表の困難拙劣は心理的當惑に由來することが多い。情緒的に不安であると誰でも吃り自由明確に話し難いものである。

以上五つの場合の何れかに當てはめ、その原因によつて合理的に處理されねばならない。二、三の場合は醫學的治療が必要である。五の場合が案外多いので私共が事例に直面した時、先づそれが心理的原因によるものか否かを知る必要がある。また逆に言語障害が重大な心理的結果をもたらすことも

多し。

最後に榮養失調は幼児の生活力に大きく影響する。これは一般に貧家の子女に限るように思われているがさうではなく裕福な家庭の幼児にもあることを注意したい。即ち偏食とか食物は充分であつてもそれが質的に生長しつゝある幼児の生理的有機的要求に合致しないとかが言う場合である。

(三)

コリンズは誕生より十九才までの人口一千に對する疾病及び死亡の比率を調査して左の如き結果を發表している(註。)

	五才以下	五才—九才	十才—十四才	十五才—十九才
疾病數	一、二二二	九七八	六七九	五九九
呼吸器病	五三七	四二四	三〇三	二五三
傳染病	二三五	二四一	九七	四〇
消化器病	一五六	六九	五一	五五
事故	七一	八六	八六	八一
皮膚病	四二	四一	四三	四八
耳病	四一	二八	—	—
その他	一三〇	八九	九九	一二二
死亡百分比	一七・一一	一・九二	一・四六	二・四一

最も多いのは風邪を含む呼吸器病であり、次は癩疹の如き傳染病、次は事故災厄である。疾病は必ずいらいらするとか憂鬱になるとか言つた気分と、落ちつかぬとか元氣がないと言つた行動とに心理的徴候を現わす。傳染病の始まりは發熱と行動のむらという徴候を現わす。

幼兒が病氣缺席して再び登園した時には、遊び仲間の中に戻るといふ社會的適應の問題が必ずおきる。友達が元氣に遊びたわむれているその中に入ろうとするが何となく氣後れがし、入つても永續きしない。若干の幼兒は容易に仲間との集團生活に復元出来ない。

消化器や循環系統に障害があつて時にてん疳様の失神状態に陥る子供がある。ヒステリー性の幼兒に發作が多いがその原因は有機的・生理的であるよりは寧ろ情緒的である。

#### (四)

毎日の日常茶飯事的な習慣が幼兒の健康に深い關係をもつ。就中食生活の習慣が重視されるべきである。家庭で偏食とか營養を考慮しない献立とかの爲に慢性に行動の鈍い子供がいる。或は始終間食する悪癖のため、食事時に食欲がなく平生青白く而も落つきのない子供もいる。幼稚園では出来る限り適切な食物を給食し、また食べ方の躰けをしたいものである。

學習に關する學說の中に條件付けの理論がある。パウロウ

の生理學的な條件反射説がアメリカの行動主義心理學と結合したものであり、

一、條件刺激を無條件刺激に接近して與え、  
二、再三反復して與える

ならば子供は新しい行動を學習すると説明する。例えは犬を怖れる子供に始めは友達と楽しく遊んでゐる時に一寸犬を覗かせ、次にはおいしく食事してゐる時に全身を覗かせ、段々近付けることにより子供の犬に對する恐怖情緒を取去つてゆくことが可能である如く、偏食を矯正する場合には子供を充分空腹にしておき、その子供の好きな食物を好む食物と一緒に組合せて美味しく美しく料理し、根氣強く與えてゆくことはよつて成功するのである。(註4) C・H・ハル等新行動主義心理學者の言う如く幼兒の躰けは勿論、話し方・讀み方等はこの條件付け理論から可成りよく説明され得るので現場の先生方の實證的御研究を御願ひしたい。

アメリカの家庭では、特に子女の教育に關心をもつ母親はコヒーの如き刺激性飲料が幼兒の心身の健康的成長と發達とに有害無益と知れば斷乎として與えず、常にミルクを與える程科學的生活態度をもつとは私が昨年、ニューヨーク大學教授フォレスト博士より承つた話である。

成人がラジオを聞いたたり遊戯雜誌に耽り、それに御相伴して幼兒が夜更しをすることがあるが好ましくない風習である。睡眠不足は遊戯即ち幼兒の生活——仕事に没頭出来ない幼兒をつくる。睡眠不足の子供は凡てにものうくいらいらし

易い。不注意で不氣嫌な子供の多くは昨夜熟睡していない。身體的健康ひいては精神的健康——心身一如の、また自他一如の幸福のためにかゝる食事・睡眠その他生活の良き基本的習慣を確立することは本人の健康な成長と快適な社會生活双方のため重要な私共の教育的責任である。

## (五)

健康に關して更に大きな問題はそれが人間形成、性格形成の要素として強調されねばならないと言ふことである。例えば藪脱み、餓足、結核性等の子供が健全兒とは非常に異つたパーソナリティを持つてあろうことは明確な經驗的事實である。また難聴兒、栄養不良、慢性睡眠不足の子供が健全兒に比してその興味、能力、氣分において可成り劣ることも想像に難くない。

食物にビタミン・カルシウムその他必要な要素が缺けると子供の氣質や能力に影響すると言ふので、特別配慮して施行されたミルクや食物の給食制度によつて子供達の喧嘩、亂雑、浮調子等の神經症狀が十三%も引下つたことが報告されてゐる。(註<sup>1)</sup>)

何時か大病に罹つた經驗のある子供はさうでない子供よりも恐怖とか憤怒という如き情緒表現に一層陥り易いようである。

神經系統は人間精神能力の基底であるが、これは身體の全

状態より色々に影響される。甲状腺、淋巴腺機能の異常は大いに神經系統を亂す。健康な幼兒はすべての事柄に生々とした興味をもち、他人にも好かれ、好ましい社會關係の中に生長する。かゝる身體的健康と活氣とは實際全人格性の發達に至大の關係をもつのである。

☆ ☆ ☆

教師は幼兒の身體的缺陷、不健康の最初の兆候を知る人でありたい。教師はまた幼兒の病後、その教育的心理的回復を獲得せしめる責任者でなくてはならぬ。

健康の問題は身體的活氣、活動、情調を左右すると同様に幼兒の精神的成長と發達に至大の影響をもつことを強調して終りとした。

註 1. Terman, L. M. and Amack, J. C., The Hygiene of the school child, 1925.

2. Sydenstricker, Edgar, Health and Environment, 1933.

3. Collins, S. D., A general view of the causes of illness and death at specific ages. U. S. Pub. Health Reports, 1935.

4. Jones, M. C., The Development of early Behaviour Patterns in young children, 1933.

5. Laird, D. A., Levitan, M., and Wilson, V. A., Nervousness in school children as related to hunger and diet, 1931.